

第5回 国際協力セミナー 報告

Accountability Mechanism of Multilateral Development Banks and Fixing Problem Projects

日時：2006年10月19日 16:30-18:20

講師： Mr. Augustinus Rumansara, Chair, Compliance Review Panel, ADB

Mr. Suresh Nanwani, Associate Secretary, Compliance Review Panel, ADB

司会進行：松本悟氏

参加者：29名



講演内容：

- ・ ADB Accountability Mechanism が出てきた背景
- ・ Accountability Mechanism を取り巻くトレンド
- ・ ADB Accountability Mechanism の詳細

Review⇒New policy ⇒Mechanism ⇒next policy ⇒operations manual (OM) section L1 ⇒ rationale and principles ⇒outreach ⇒translation of information brochure

- ・ ADB Accountability Mechanism の consultation phase & compliance review phase について
- ・ クレームを受けた事例の紹介
- ・ 今後の課題

* パワーポイント “Accountability Mechanism of Multilateral Development Banks (MDBs) and Fixing Problem Projects” に沿ったプレゼンテーション



質疑：

フロア>インフラ整備プロジェクトにおける「被害」はわかりやすい事例だが、社会開発系のソフトなプロジェクトにおいては、「被害」や「問題」をどう定義しているのか。また、クレームする側（住民側）が「問題」としていることは、プロジェクト実施側にとっても問題なのか。

Mr. Suresh Nanwani>確かにインフラ整備プロジェクトの「被害」は目に見えやすいので、クレームも多い。社会開発系のプロジェクトではクレームがほとんどでていない状況。もちろんこれは、問題がないという意味ではないと認識はしているが。問題点とプロジェクトの直接的関連性を見るのは非常に難しいし、現にパネルが「関連はない」と結論を下すこともある。

フロア>クレームをする人が「本当の」被害者であるかどうかは、どのように判断するのか。どのように市民社会が受ける影響を定義付けているのか。プロジェクトによって誰がどのような影響を受けるのかをどう測定しているのか。

Mr. Suresh Nanwani>難しい問題だが、適宜 testing を実施している。ドキュメント上では被害の程度、被害者がわかりづらいため、現場を見るなど必ず独自に検証している。

フロア>紹介された Accountability Mechanism は、過去のを改良したものなのか、全く新しいものなのか。1995 年以前も ADB プロジェクトに対するクレームはあったはずだが、どのように対応していたのか。

Mr. Suresh Nanwani>1980 年代から human rights に関する議論が高まり、G7 に対する一般市民の抗議行動なども目立つようになった。このような流れで、実際のところ住民側がプロジェクトにクレームするようになったのは、1990 年代以降である。それが government policy にも影響し、今日のメカニズムが出来上がった。

Mr. Augustinus Rumansara>1990 年代から NGO の参加が進み、また環境問題が深刻化してきたことも影響している。

吉田先生（元ADB職員としての知見から）>以前はADB他、開発プロジェクトの「問題」は、当該政府が対応すべき、と考えられていた。しかし政府による対応には限界があり、またドナー側にも責任はあるはずという考え方が主流となり、各ドナーも独自にクレーム対応制度を作るようになったという経緯もある。

フロア>クレームされるプロジェクトの問題事例から学ぶことによって、このメカニズムが改善されるだろうが、同時に普段のプロジェクトが改善されなければならない。普段のプロジェクトでは何が起きているのか。また、各ドナーがばらばらなクレーム対応をしていては、住民側は混乱するし、悪用するケースもでてしまうのでは。ドナー間の強調も必要だろう。

Mr. Augustinus Rumansara>まだまだ途上国政府の関係機関には普及していないのが現状であり、こういったメカニズム構築に消極的なドナーもあり、非常に難しい問題である。。



議事録担当：永吉 洋之（M2）、石曾根 道子（M2）